

フィリピンと日本をつなぐ架け橋となる教員を目指して

浜松市立豊岡小学校 教諭 宮崎 慎也

はじめに

フィリピンに行きたい。私がそう思ったのにはフィリピン出身のALTの存在が大きい。彼女の流暢な英語、何歳からその流暢さで話せたのか聞くと、「中学1年生」と答えが返ってきた。彼女が他の生徒に比べ、特別英語ができたのではなく、一般的な話だと聞いてさらに驚いた。ただ、それは学校に通えた場合の話であることも知った。つまり学校に通えない子がいるという実態がある。フィリピンの高い英語力と教育格差。国際理解教育について考える一人の教員として、そんなフィリピンのリアルを見たいと思った。

フィリピンの授業

実際に私が参観した授業の使用言語は全て英語。母語で授業を行うのは幼稚園まで。小学1年生からはフィリピン語以外の全ての教科を英語で行うことが一般的。私は機会がある度にフィリピン人の英語力の高さについて質問した。すると、日常的に触れるメディアに英語が浸透していることを挙げる方が多かった。私が訪問したダバオはビサヤ語を母語とする地域である。幼少期の家族間や地域での会話はビサヤ語で行う。最も愛着をもち、自己のアイデンティティに大きく影響を与えるのはビサヤ語である。しかし、テレビ放送は国語であるフィリピン語か英語しかない。幼稚園以降は日常的に英語に触れるため、自然と英語を習得できるのだろうと話していた。

フィリピンのカリキュラム

特徴的だと感じたのは以下の3点。1点目は、毎日「フィリピン語」と「英語」の言語学習が各1時間、計2時間設定されていること。これにより国際的にも高いとされる英語力を

習得していると感じた。2点目は、「MAPEH」という統合型の教科があること。日本のSTEAM教育と軌を一にするものだと感じた。3点目は日本語をカリキュラムに組み入れていること。標準中国語を指すマンダリンを教えている学校もあった。各校独自の特色あるカリキュラム運営に驚かされた。

フィリピンで感じたキャリア教育格差

私が、ジプニーと呼ばれる乗り合いタクシーに乗った際、運転手の娘さんが助手席に座り、終始スマートフォンを操作している様子があった。父親の仕事で、終日同乗しているとすれば、この子にとって家族以外の大人と関わる機会があまりにも少ないのではないか。実際にフィリピン国内では、家庭によっては学業よりも労働を勧められ、子供たちが進学を諦めることもあるそうだ。ここで私は日本のキャリア教育の価値について再認識した。校外学習、外部講師の講話、職場体験等、家族や教師以外の大人と触れ合い、職業について考える機会がいかに大切かを感じさせられた。今後、フィリピンにおいても幅広く将来が選択できるような教育がなされるよう願うとともに、私自身も目の前の児童が将来を見据え、多様な選択肢の中から自分の将来を自己決定していけるような支援をしていきたいと改めて思った。

終わりに

授業視察に加え、現地の方から話を聞く機会に恵まれ、高い英語力の背景や、生活の実態、価値観等、多くを肌で感じる事ができました。今回の知見を今後の英語授業、外国籍児童支援等の教育実践に生かしてまいります。本研修にあたり御支援いただいた企業経営研究所の皆様にご心より感謝申し上げます。



風通しの良い教室 先生は常時マイクを使用



英語の語順についてのグループ学習の様子



グループでの学習を全体へと共有する場面